生涯学習研究（宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要）第11号，2006

研究ノート

生涯学習におけるＩＴ活用の展開

髙橋　利行

要旨

本稿は、「シンポジウム e-Learning みやざき 2005」における発表内容をまとめるものである。ここでは、シンポジウムのテーマである「全国的動向と宮崎県の現状をもとに、e-Learning のこれからを考える」に基づき、まず、宮崎大学生涯学習教育研究センターにおけるこれまでのＩＴ活用と全国の生涯学習における先進的な事例を概観した。その上で、生涯学習におけるこれからのＩＴ活用のあり方を考える際のいくつかの視点を提示した。

Development of IT Use in Lifelong Learning

Toshiyuki TAKAHASHI

Abstract

This text is a summary of the announcement at the symposium "e-Learning MIYAZAKI2005". In the announcement, first of all, it took a general view of the IT use in Education and research center for lifelong learning,University of Miyazaki and the advanced case in the lifelong learning in the whole country. Some aspects that thought about the IT use in the lifelong learning in the future were presented on that.

Keywords: Lifelong Learning, IT Use, Infomation Technology

はじめに

本稿は、平成 17 年２月 19 日に開催された「シンポジウム e-Learning みやざき 2005」において、発表したものをまとめるものである。発表では、このシンポジウムのテーマである「全国的動向と宮崎県の現状をもとに、e-Learning のこれからを考える」に基づき、まず、宮崎大学生涯学習教育研究センターにおけるこれまでのＩＴ活用と全国の生涯学習における先進的な事例を概観した。その上で、生涯学習におけるこれからのＩＴ活用のあり方を考える際のいくつかの視点を提示した。

１．宮崎大学生涯学習教育研究センターにおけるこれまでのＩＴ活用

生涯学習教育研究センターでは、これまで、衛星通信を利用した公開講座として、以下のようなものを実施してきている。

○平成 10 年度：文部省委嘱事業衛星通信利用による公民館等の学習機能高度化推進事業（宮崎・島根国立大学衛星通信利用推進協議会『古代ひむかといづも－古代人の死の意識と死者への鎮魂－事業実施報告書』平成 11 年３月より）

本事業は、島根大学生涯学習教育研究センターと連携して行われたもので、講座の開催期間は平成11年2月6日から14日の土曜、日曜（計4回）である。使用された通信機器・設備としては、講座の放送会場から受講会場への配信に衛星通信が利用され、放送会場と受講会場の双方向通信にテレビ電話とファックスが利用された。

○平成11年度～14年度：エル・ネット「オープンカレッジ」の実施

①「自然と農業－21世紀農業のデザイン－」（平成12年1月13日～2月3日）

②「宮崎の生活空間と科学技術の接点」（平成12年11月30日）

③「照葉樹林と黒潮の文化」（平成13年11月20日～22日）

④「日本文化の源流を探る－日向と出雲の神話と芸能－」（平成15年1月18日～2月15日）〈島根大学生涯学習教育研究センターとの連携により実施〉

①から④のいずれにおいても、講座のメイン会場から受講会場への配信に衛星通信を、メイン会場と受講会場の双方向通信にテレビ電話とファックスを利用して行われた。

2．全国の生涯学習における先進的な事例

（1）徳島大学大学開放実践センターの公開講座[1)]

○「空海と歩くⅡ－四国阿波遍路2004－」（平成17年1月8日～3月25日）

これは、受講者それぞれが、万歩計を付けて歩いたデータを携帯電話でブログへ送信することにより、バーチャルお遍路を行うものである。教室外で生起する学習体験とそれに伴う感動などをその場に居合わすことができない人たちも共有することが可能になる。なお、この講座に関連して、ウォーキング準備編「空海と歩くⅠ」も実施されるなどの工夫がなされている。

（2）富山インターネット市民塾[2)]

民間企業（インテック）の提案により、平成10年に取り組みを開始し、平成14年5月に県・市町村、大学、民間企業、市民を会員とする推進協議会を設立し、共同で運営されている。県民教授制度「自遊塾」をモデルとして、市民講師による自発的な講座の開催を支援し、地域の知識財を顕在化させるとともに、インターネットを介して「知の還流」を活性化させている。

（3）ふなばし市民大学校の実践[3)]

ふなばし市民大学校は、平成15年度まで別々に実施されていた、老人大学、ボランティア大学、スポーツ健康大学、生涯学習コーディネーター養成講座の4つを1つにまとめ、平成16年度から始まったものである。ここで、エル・ネット「オープンカレッジ」の番組をビデオに録画し、ビデオ視聴と実習をうまく組み合わせた講座が実施された。講座の主な流れは以下のようなものである。

①講座のねらい、進め方の説明

②ビデオテープ（仙台大学講座「スポーツ科学と健康・体力づくり」の『バランスと転倒予防』の回）の試聴

③休憩（休憩時間の30分間を活用して「健脚度テスト（10m全力歩行、最大一歩幅、40cm踏み台昇降）」を実施）

④ビデオテープの続きの視聴

なお、この講座の企画・運営は、生涯学習コーディネーター養成講座の修了生たちで組織されている「船橋市生涯学習コーディネーター連絡協議会」の人々が中心となっており、教育委員会社会教育課の職員が、それを支える形で行われている。また、講座の受講生からは、「実技とビデオテープの組み合わせというスタイルがよかった」といった感想が出て

いる。

３．生涯学習におけるＩＴ活用の展開

以上のような動向を、使用されているメディアと情報の流れる向き、および学習者の参加・関与のあり方という点から整理すると、次のようなことがいえるであろう。

まず、宮崎大学生涯学習教育研究センターのこれまでのＩＴ活用では、メディアとしては通信衛星が利用され、方向性としては、提供側からの情報の配信といったことに主眼がおかれている。もちろん、質疑応答のための双方向性の確保も行われてはいるが、この時点では、まだ、遠隔地へ講座の配信を行い、空間的制約を克服するために、通信衛星という大がかりなメディアが活用されているということができる。

それに対し、現在の先進的な事例では、使用されるメディアが、携帯電話やインターネット、オープンカレッジのビデオといったものになってきており、そこでは、学習者からの情報の発信、学習者の積極的な参加・関与といったことが行われている。つまり、メディアについては、大がかりなものから身近なものの活用へという流れがあり、方向性については、学習者の受動的な参加から能動的な参加へという流れがあるということになるであろう（図１）。このように、さまざまな技術の開発・導入によって、時間的制約や空間的制約が克服されてきており、生涯学習におけるＩＴの活用は、各地に広がりをみせてきている。

それでは、生涯学習におけるこれからのＩＴ活用のあり方を考えていくことにしよう。ここでは、生涯学習を語るときによく言われる「いつでも、どこでも、だれでも」ということをキーワードにして考えていくことにする。

これまでにみてきたように、様々なＩＴの活用により、いつでも、どこでも、だれでもということが、かなり実現されてきている。そして、オンデマンド化、パッケージ化されたｅラーニングの導入ということになれば、さらに、それは実現されることになるであろう。なお、このいつでも、どこでも、だれでもということは、それぞれが相互に関連しあっているものであるが、いつでもとどこでもに関しては、基本的に、なんらかの新しい技術の導入は、それぞれに常にプラスの方向に働くものと思われる。しかし、だれでもということに関しては、新しい技術、例えば、より高度な技術が導入されるということが必ずしもプラスにだけは働かないということが起こりやすいものであり、少し特殊であるといえるであろう。

ここで、このだれでもということにさらに注目してみていくことにする。だれでもということを考える際には、学習者（学習機会の提供を受ける側）としてのだれでもということだけを考えがちであるが、学習機会を提供する側としてのだれでもということも考えていく必要があるのではないだろうか。これは、学習機会を提供する機関・施設といった形で考えれば、どこでもということになってくるのかもしれないが、例えば、先進的な事例として取り上げた徳島大学の携帯電話、ブログを使った講座と同様の講座を、宮崎大学生涯学習教育研究センターが実施できるかといえば、それはかなり難しいといわざるを得ない。それは、このような講座を実施するためのノウハウがないからということになるであろう。そこで、生涯学習におけるこれからＩＴ活用のあり方の１つとして、「情報の共有化が重要である」ということをあげることができるであろう。これは、学習用コンテンツとしての情報のみならず、学習機会あるいはコンテンツを提供するためのノウハウも共有していくことが求められるということを含めての

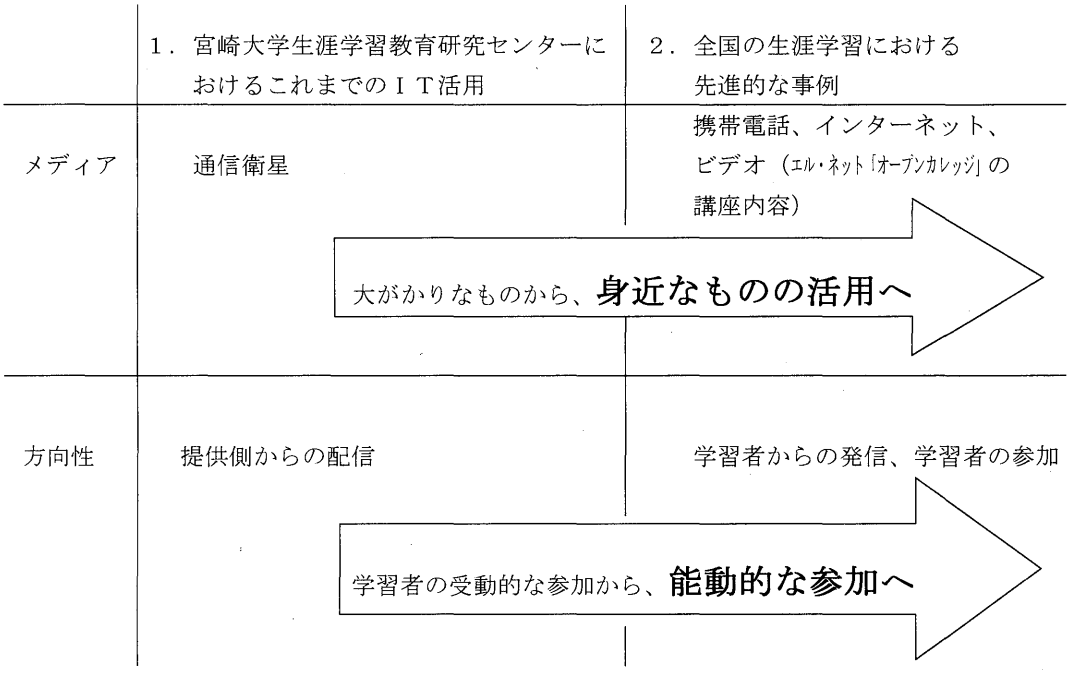

図１　生涯学習におけるＩＴ活用の動向

ものである。学習機会を提供する側が、いつでも、どこでも、だれでも学習機会を提供できるようになっていくことは、いつでも、どこでも、だれでもが学習できるということの実現に寄与するものと考えられるからである。

おわりに

さらに、生涯学習におけるこれからのＩＴ活用のあり方ということで、２点あげることにしたい。ＩＴの活用、ｅラーニングの導入によって、様々な可能性が広がっていくということは、十分承知した上で、ここでは、敢えて逆説的に提示したいと思うが、まず、１つめは、学習者の視点に立つことを忘れてはならないということである。これは、多様な学習者のニーズや特性をしっかりつかむことが大切であるということにもなるであろう。主に、学習機会の提供側となることが多い者が望ましいと考えていることと、学習者が求めていること、望ましいと考えていることとは、必ずしも一致しないことが多いということでもある。

そして、２つめは、ＩＴ（あるいはＩＴ活用）の高度化および多様化により、学習者の選択の幅が広がるようにしていかなければならないということである。高度化、多様化するＩＴを活用することによって、様々な可能性が広がっていくことは、先にも述べた通りであるが、何か新しい技術・高度な技術が利用可能になると、学習機会を提供する側は、とかく、そればかりを利用しようとしてしまう傾向があるように思われる。しかし、新しい技術・高度な技術というものは、その機能

性や便利さとともに、その恩恵にあずかれる人々の範囲を狭めてしまう危険性も合わせ持っている。様々なＩＴの機能性、便利さを上手に活用し、積極的に導入していくということは重要なことではあるが、生涯学習の場合には、特に、多様な学習者の多様な学習ニーズに応えていく必要があるので、その危険性に対する検討も忘れてはならないであろう。

注

1) これについては、平成16年10月9日に開催された「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」(於：放送大学愛媛学習センター大講義室）において、徳島大学（吉田敦也）より先進的モデルとして事例発表された時の資料、及び http://www/cue/tokushima-u.ac.jp/program/program.htm などを参照。

2) 山本恒夫ほか編『生涯学習［ｅソサエティ］ハンドブックー地域で役立つメディア活用の発想とポイントー』文憲堂、2004年、45頁などを参照。

3) 日本視聴覚教育協会『視聴覚教育』第58巻・12号、平成16年12月、29～31頁を参照。

(2006年1月31日受稿，2006年3月10日受理)